

神奈川県横浜市在住の画家、工藤政秀さんが香川県多度津町の海沿いのカフェ『うみかギャラリー』で個展を開いているというので出かけた。同行者は弘井正さん。

最初、高速道を行っていたが、香川に入り、大野原で高速を下り、海沿いの道を行った。瀬戸内の風いだ海沿いは高知とはだいぶ景色が違い、それなりに愉しかった。高知の海はつねに波立って白い波頭が太陽光をうけて輝いているが、瀬戸内の海は鏡のように静かである。弘井さんは以前行ったことのある琵琶湖にたとえていたが、瀬戸内は湖といってもいいような海である。

町から少し離れた場所にあるカフェなので、義弟にカーナビを借りたのだが、さすがに賢い。「右、左、右、左」と言われるままに運転していると目的地に着いた。警察が市民を監視したいとおもっているのもよくわかるというものだ。権力が市民の自由を監視することで市民の自由が担保される、という危うい言説が権力の側から繰り返し吹聴されている。

で、工藤さんの絵のことだが、久々に見たのだが、最近『森に棲む』と題して作品を発表している。今回は10点ばかりの展示。次ページの山羊（たぶん山羊だとおもうが）の顔のタイトルは「白炎」。カラーでないので申し訳ないが、緑や黄色、その周辺の色で構成されている。悲しい表情のようでもあるし、怒りを含んでいる表情のようでもある。「白炎」というのだから、なにかしら激しいものが内奥にあつてそれがぐっと湧き出ようとしているのだろうか。そう見れば、山羊の顔は悲しさよりも

怒りをこらえているように見える。森に棲む、のは動物だけではなく、鳥類も植物も昆虫も微生物も、細菌、ウイルスも棲んでいる。ヒトも棲んでいるのだが、それはときとして比喩として使われる。しかし、ヒトも森に棲んでいるのだ。

この世の生き物はみな、自由という幻想のなかで生きている。一見、森に棲む樹木はみずから移動できないために不自由だとおもわれているがそうではない。枯葉や木の実を落とすことで細菌を呼び、微生物を呼び、動物や昆虫を呼びこむ。みずから足を運ばなくてもあらゆる生物が訪れてくれるのだ。そして、木の実を鳥が遠くへ運んでくれることで次世代は遠く離れた地で新たな生を授かる。そういうふうには、その場に根を張っている樹木も自由を担保している。

そんなふうに、森に棲む、ということはその暮らす生き物が、たとえ、一見、不自由である姿を晒していても、工夫して自由（幻想であつたとしても）を担保して暮らしていくことだとおもうが、では、山羊は、森で暮らす山羊は、この山羊は、なぜ、白い炎を感じさせる怒りをヒトに見せているのだろうか。

森がうしないつつある自由を怒っているのだろうか。あるいはすでに、森は自由という幻想さえ奪われているが、そのことに気づいていないヒトにむかつて、悲しくも怒りを見せた表情を晒し、ヒトもそのうちこういう表情が常態になるのだ、と警告しているのだろうか。山羊の表面を覆っているひっかき傷のような筆運びは、すでに森の自由が半ば失われている証左かもしれないが、ヒトはまだ、安穩と、自由という目くら

ましのなかで日々を過ごしている。そう簡単に自由は失われな
いぞ、とおもって暮らしている。その油断が、森に棲む山羊を
しらすしらすのうちにむしばんでいる。ヒトの油断でむしばま
れていく山羊の自由。この絵と向かいあうことでそのことを知
ることができるだろうか、森に棲んでいないヒト族は。ほくも
弘井さんも。

